



風の便り(第78号)

発行日：平成18年6月

発行者：「風の便り」編集委員会

第67回フォーラムレポート



教育行政の刷新



今回は福岡県飯塚市の教育行政の新しい出発を素材にさせていただき、フォーラム初めての参加者全員を4グループに分けた「ブレイン・ストーミング」を試みた。初めに、森本教育長、勝田課長から基本なお考えを提示いただき、それらを核として参加者が自由に発想してみた。時間があまりにも短く、急ぎ足の意見集約であったためそれぞれが十分に意を尽くせなかったであろうことは十分想像している。それでも咄嗟の発想と意見こそが各人の現状認識の原点である。

ご意見の解釈、背景の説明、補足的提案の追加などは皆さんの議論に触発された筆者の独断と偏見と責任で行なった。「勇み足」、「読み込み過ぎ」、「思い過ごし」、「想像過剰」など文責はひとえに筆者にある。ご参加の皆様のに意に添わないところは事前に寛容なお許しをお願いしたい。なお、当日は飯塚市の関係者はもとより、佐賀県吉野ヶ里町 最所三千夫氏、佐賀県教委 関 弘紹氏、長崎県佐世保市 智創研究所 西野寿弥氏、山口県生涯学習センター 赤田博夫氏、熊本県熊本市 「心豊かな熊本を創る運動推進協議会」事務局の林田興文氏など県外から遠来のお客さまもお迎えして部屋は満杯となり、1時間の討議は熱を発して盛況であった。

1 「合併に伴う旧住民意識の変革は学校の変革から」

—最大の課題は「学校のあり方」の革新である—

発言が最も集中したのは学校改革である。「まちづくりの課題は学校変革が最優先である。」という認識が根底にある。

「子宝の風土」の求心力は学校にある。学校は藩校や寺子屋以来一貫して大事な「宝」の未来工房であった。学校は子どもの希望の生産

現場であり、住民の発展願望の世俗「信仰」の対象であった。教師が尊敬され、学校が文化センターとなり、運動会がコミュニティの祭を兼ねる事ができたのもそのためである。それゆえ、聞こえてくる学校への不満や教師への不信は、希望の芽を潰され、信仰の対象を失い、地域の

- 1● 第67回フォーラムレポート 教育行政の刷新 P1
- 2● 敵は「伝統」と「しきたり」と「おのれ自身」 P7
- 3● “おれたちはただの1円ももらっていない” —二本足の“ボランティアただ論” P10
- 4● 小学校への提案(その4) 「食育の死角」 P11
- 5● Message To and From P13
- 6● 編集後記 論理の赴くところ P14

連帯を支えてきた求心力の衰えを嘆く声でもある。分かっていないのは当事者の学校とその監督者の教育委員会である。学校が再び希望を生み出す「やしろ」となりうれば、人々は学校を中心として地域の連帯を確認し、子宝の風土は活力を取り戻す。合併によって一度バラバラになった住民意識も学校を論じ、学校の変革を

地域の日常の中心課題に据える事によって新しい連帯を紡ぎ出す事ができる。いつの日も「子宝の風土」にとって子どもの成長と未来を支える学校こそは関心の中心に位置しているからである。ブレイン・ストーミングの提言も期せずして「学校革新」が最重要課題に浮上した。

(1) 「学校は地域に開放せよ」、「教員は地域の人間関係から逃げるな」

読みづらいたらうが提案の意見はそれぞれに学校に寄せる期待の重さを感じられる。若干の重複を厭わずに列挙すれば以下の通りである。「学校施設はコミュニティに開放せよ、特に夜間はサークル・グループに開放せよ」、「学校を地域と共同経営のコミュニティスクールにせよ」、「学校に地域のボランティア活動拠点をつくれ」、「空き教室は高齢者サロンに！（高齢者を一人にするな！）」、「学校施設を公民館的に活用せよ」「空き教室の展示利用」、「高齢者と子どもの日常的接触を工夫せよ一学校内にデイケアセンターを設置せよ」、「空き教室には恒例者福祉施設を設置せよ」、「学校内に学校支援ボランティアの拠点を創り、常時学内備品などの保守／点検をお願いする」、「学校は学校外の子どもの安全に関与せよ」、「地域の熟年を学校に入れよ」、「岡山県のシニアスクール（註*）のモデルもある、穂波町の『熟年学び塾』モデルもある」、「空き教室も活用せよ」、「安全や高齢者の孤独を地域の問題とするな、学校の問題として捉えよ」、「安全対策委員会を立ち上げ、熟年の研修も実施せよ」、「部活には地域の力を導入せよ」、「学校はコミュニティ・スクールになるべきである」、「コミュニティ・スクール推進研修会を開け！」、「学校内に高齢者の活動拠点を！」、「余裕教室は保教育の拠点に」、「学校に岡山型「シニアスクール」の導入を」、「高齢者の学ぶ場と貢献の場を学校に！」、「18時迄は学校に子どもの居場所を保障せよ」、「高齢者等の力を借りて小学生にも乳幼児保育（の実習機会）を導入せよ」、「『部活』に地域の指導者を導入せよ」、「校長に特色づくりの

デザインを作らせ、教員の異動希望を取り入れよ」、「学校づくりは校長の腕で、教員の獲得はトレード制で！」、「校長が変わらなければ学校は変わらない」、「学校の特色は教育行政の特色に連動している」、「校務分掌に『地域連携係』を導入せよ」、「校務分掌に『保育と教育の連携係』を導入せよ」、「校長に学校の施設・機能のフル活用の意識を注入せよ」、「学社の融合・連携研修を徹底せよ」、「教員にボランティアを、体験ではないボランティアを！」。

註* 第25回発表事例：

NPO 法人子ども達と共に学ぶ教室「シニアスクール」の過程と成果 - 「コミュニティ・スクール実践研究校」の挑戦と試行錯誤-
発表者 岡山県岡山市岡町 NPO 法人子ども達と共に学ぶ教室シニアスクール

理事 藤井 敏明

文科省指定「新しいタイプの学校運営のあり方に関する実践研究校」として出発し、「コミュニティ・スクール」のモデルを提示することが課題であった。実践上の枠組みとして中学校区内のすべての保育・教育機関が連携した地域教育力の向上の取り組みとして「シニアスクール」を企画し、ボランティア講師を募集し、学習内容を検討し、世代間交流の実態を研究した。結果的に、高齢者は新しい目的を発見し、高齢者の指導を受けた学校・園の子ども達には落ち着きが見られるようになった。

(2) 「学校間の指導の一貫性を確保せよ」

少年の危機の最大原因は疑いなく家庭の子育てにある。しかし、その危機に対処できない原因は学校と教育行政の責任である。昔から、日本の家庭は1人前のトレーニングは第三者の「守役」に付託して来た。現代の守役こそが学校に外ならない。守役は家庭から子どもを離し、「他人の飯」を用意し、「世間の風」を吹かせ、「可愛い子」に擬似体験の「旅」を与え、「辛さに耐えて丈夫に育ててきた」のである。教師は絶えず修養の重要性和守役の責務を保護者に説き続けてきた。現代はそれができるか？できまい！

福岡県PTA連合会が取り組んでいる「新家庭教育宣言」のメッセージが届けるべき保護者に届かないのは、もはや学校と教師が保護者への説得力を十分に有していないからである。それができるためには教師が親の信頼と尊敬を勝ち得なければならない。子どもという「宝」を守り育てる事に献身と奉仕の姿勢で立ち向かってこそ教師への信頼が生まれる。だからこそ「子宝の風土」の教職は「聖職」になったのである。自分達と同列の「教育労働者」を住民が特別に尊敬する道理はない。教育行政は自らの責任と指導を放棄して各学校の恣意的な分業を許してはならない。教育の目的地は自明である。それは保護者に感謝される「一人前」を育てる事である。換言すれば流行りの子どもの「生きる力」を育てる事である。だからこそ預かった子どもが「一人前」にならない時は教育行政の失敗である。「生きる力」が衰退したのは、学校の責任であり、学校は付託された守役の機能を果していないということの意味する。

恐縮ながら、「子宝の風土」の家庭には「一人前」を育てる能力は稀薄である。現在行なわれている「家庭教育推進事業」などは風土の実態を理解しない教育行政の的外れな施策である。保護者を責めたり、保護者を教育しようなどという考えは「子宝の風土」において決して機能しない。「子宝の風土」はただひたすら子どもを護り、子どもに献身的な奉仕を行なうのみである。「一人前」のトレーニングはいつの時代も「守役」の任務であった。

参加者の提案は関係教育機関の有機的な連携に集中した。

以下順不同、多少の重複はあるが列举の通りである。

「幼・小・中の連携、一貫性を確保せよ」、「小・中の生活指導を一貫的に実施せよ」、「保育と教育を一元化せよ」、「教育内容、教育方法で異なった教育関係機関の学習者を組み合わせよ-保育園+小学校、小学校+中学校など」、「幼保と小学校教育の生活指導を共通化・一貫化せよ」教育と保育を統合し、就学前の保護者教育を徹底する、「保育と教育の統合はトップダウンで実行するしかない」、「中学生には保育体験の機会と場を設けよ」、「学校長、保育所長、幼稚園長の合同会議を創設し、自由な発言を保障せよ」、「家庭と地域の教育力を増強せよ」、「地域の人材を発掘・確保せよ」、「就学前保護者教育は幼稚園保育園に設置する親教育センターで」、「高齢者等の力を借りて小学生にも乳幼児保育を導入せよ」。

(3) 評価の導入と学校の個性化

評価は難しい。中でも教育評価、教員の人事評価は難しい。評価する側の人間の質が反映するからである。大学の経営を担当した時代、覇気のない-小理屈の多い幹部の一人が職員の採用面接にあたって、「エネルギーのある前向きの人材」が欲しいと発言したのに驚いたことがあった。「エネルギーの無い、しかも前向きでないあなた」がどうしてそのような人材を判

断できるのか！？子どもの内申書評価も難しいが、結果が出るまでに時差を伴う「総合的」・「創造的」な教員の仕事の評価はもっと難しい。筆者の結論は現状では実行不可能であるが、単純である。それは「終身雇用制」を廃止して、期間限定の契約人事システムにすることである。そうすればシステムそのものが「契約更改」に向かって確実に職員の自己評価と客観評価

を進化させる。終身雇用制を温存して何をやっても、結果は中途半端に終るであろう。筆者が大学改革をしくじった最大の理由もこの問題に手をつけたからであろう。当時は全くのタブーであった。ともあれブレイン・ストーミングの具体的提案は「学校選択制」の実施も含めて以下の通りであった。

「教員の評価システムを導入してやる気を変革せよ」、「学校の独自性を認めて、推進する」、

「学校評価を充実する」、「学校個性の背景は『学校選択制』で!」、「学力調査の結果を徹底分析せよ」、「学校選択制を実質的に保障する登下校方法を工夫せよ」、「まちかど評議員制度をつくれ—学校評議員制度だけでは不十分」、「学校の個性化を推進せよ」、「学校紹介パンフレットを工夫／活用せよ」、「学校に厳格な外部評価を導入せよ(内部評価の「なあなあ」を排せ)」。

(4) 学校は尊敬と信頼を失った

学校が信頼と力を失い、教師が人々の尊敬を集めなくなったのは学校という閉鎖社会を作って地域の課題から逃げたからである。学校関係者はただでさえくそ忙しいのにこれ以上地域の問題など持ち込まれてたまるか、と思うだろうが、そうした反応は、子宝の風土の学校の位置付けを理解しないが故である。地域は常に地域に貢献する学校の味方であり、それも強力な味方である。学校が地域の問題を引き受けた瞬間から学校はあらゆる点で地域の協力を受ける事ができる。地域への貢献と子どもの教育への献身によって、教師が人々の尊敬を勝ち得れば、保護者も教師の助言に素直に耳傾ける、結果的に家庭との連携が深まり、教育効果は上がる。それが日本における「学校の神話」である。神話はかつて存在し、これからも当然復活

し得る。

教育行政が為すべきことはそのように学校を導き、条件を整備し、コミュニティと「協働」する学校のモデルを提起し、創造する事である。参加者による提案の過半数が「学校改革」に収斂したのもうなずける。参加者個々の提案事項に筆者の解説と可能なモデル案をつければ容易に1冊の書物ができようであろう。それくらい現状の学校には工夫の余地が残されているのである。しかも誰もそれらの改革に組織的に着手しようとはしていない。公立学校を1校つぶし、指定管理者制度を活用してその運営をわれわれのチームに任せてみないか?参加者の提案を整理して行くと夢のような企画が広がる。

2 教育行政のシステム改革

地域と学校が遊離したのは教育行政が採った分業のシステムの結果である。文部科学省の生涯学習関係部局と初等中等教育部局の関係から始まって、地方教育委員会の学校教育課と社会教育課はほとんど協調できていない。それゆえ、「教委内部の学校と社会教育の関係を強化せよ」という意見や「学校教育課と社会教育課の1メートルの距離は1キロに匹敵する」という分析がでるのである。提言には「教員の意識改革こそが改革のスタートである」とか「教員に生涯学習や社会教育の実際と意義を理解させよ」とか「教員の体力・耐性作りから始めよ」などが並んだ。教育委員会が学校教育委員会に終始しているという事は長年に渡って言われてきた事である。しかし、これらのだ

れがどのようにシステム化し、実行するのか。学校の地域参加にしても、学校の地域開放にしても、スローガンは踊ったが実行はできていないのである。何故か?

人々のブレイン・ストーミングが見落としがあったことが一つある。それは教育行政にリーダーが不在である、という事である。端的に言えば、巨大な学校組織と積年の学校のしきたりと伝統の変革に挑むリーダーシップを取る事は学校教育の経験者には至難のわざである。現状を刷新しようとするれば、彼らはかつての出身母体を裏切らざるを得ない。先輩教育長や校長のやり方を否定しなければならない。何よりもかつての同僚や部下の恨みを買う事にもなるであろう。現状の変革を前提にした時、学校出身の

教育長や教育委員では実行不能である理由がそこにある。学校出身者を安易に教育長にするのは間違いであると主張しているのはそのためである。いまや、教育は生涯学習の推進を初め、日本社会変革の「要」となった。その時、変えるべきことを変えることができなければ、教育委員会無用論の浮上は当然の帰結である。

ブレイン・ストーミングの提案は問題の大きさに照らして、あまりにも断片的であるが、われわれの想像力を駆使して理解するしかない。

「新しい教育行政システムを創設せよ—例えば、戦略的特別部署の設置、緊急課題対応部署の設置、時限的プロジェクト部署を創設」、「学校の特色は教育行政の特色に連動している」、「高齢者の指導能力を把握せよ」、「教育委

員会の公開制を導入せよ」、「教育行政組織の内部改革を実施せよ」、「学校を変革し、教育委員会を刷新し、教職員の資質を向上させよ!」、「ニーズ対応型教育委員会組織に改編せよ」、「教育委員の構成を多様化するため再検討せよ」、「首長を含めた教育政策研修を!」、「学校内部に職員以外の人々も含めた生涯学習推進の組織を設置せよ」、「まずは職員を職務に精通させよ—職員の知識・体験の中を広げよ」、「職員の感性、創造力の向上」、「コミュニティの交流を促進するプログラムを工夫せよ」、「システムより人である」、「答の多様化を受け入れ、様々な試行を歓迎せよ—オリジナリティこそが重要」、「システムは大事であるが環境はもっと大事である」、「教育委員会内部の人事を相互交流させよ」。

3 首長部局との協働

今や地域が当面する課題は「複合課題」である。従来の行政の縦割りで解決できる種類の問題ではない。当然、少子高齢化や男女共同参画が絡んだ問題は教育行政だけで解決が出来る筈はない。それゆえ、首長部局と教委との緊密な連携は不可欠である。それができないというのであれば、学校を除く教育部門は首長部局へ移した方が一貫した対応が可能になる。まちづくりの最終責任者は疑いなく教育長ではなく首長だからである。それゆえ、提起された処方の最終目的は「首長部局との協働」である。

処方の具体例は以下の通りである。

「地域課題対応型のシステム構築—地域の安全、厚生、教育の総合的ネットワークをつくれ」、「保育所、交番、学校、老人ホーム、公民館など個別機関の機能を複合化せよ」、「総合的な高齢化対策ボランティアシステムを創設せよ」、「新しいまちをつくる行動するボランティア組織を創設せよ」、「学校選択制を支援するため『コミュニティバス』を運行せよ—福祉バスを活用する」、「給食の提供過程を教育に活用せよ」。

4 戦後教育思想の変革に繋がるか?

ブレイン・ストーミングの成果はおおよそ筆者の関心に合致したが、最も注目したのは、戦後教育が原理とした「児童中心主義」に対する修正意見が出されるか、否かであった。もちろん、学校改革においても、教育委員会事務局システムの改革においても「鍵は意識改革であり」、「教員の意識改革こそが改革のスタート」であることに異論はない。

しかし、現在の意識をどのように「改革」するのか?意識改革のために「夏休みには教職員の一斉研修を」という意見も重要であろう。しかし、ご指摘の通り「問題は研修ではなく、

研修の内容である」。なぜなら、問われているのは研修の頻度やシステムではなく、「教育原則」だからである。それゆえ、「子どもの労働体験をプログラム化せよ」、「高校生には起業体験、営業体験を!」、「給食を教育に活用せよ—生産者の話を子どもに繋げ!」、「通学合宿を全市に拡大せよ」、「子どもの基本的習慣を確立せよ」等の意見は、方法論として必要であっても、果たして原理論として十分か!?

労働体験が必要だとして、現在、総合的学習の下に行なわれているような「労働体験」で良いのか?通学合宿が必要だとして、過保護・

過干渉のままごとのような通学合宿をこれ以上普及させて良いのか？お座なりのゲストティーチャーをお招きして「生産者の話」を聞かせたとして何がどう変わるのか？もちろん、子どもの「基本的生活習慣」は確立しなければならないが、いかなる考え方に基づいてどうすすめるのか？しつけについて、日本社会はこれまでも” 家庭も、学校もしっかりしろ” と声高な

スローガンを連発して来た。それで出来なかったものがどうすれば出来るようになるのか？今回指摘された程度の認識では原理の改革には繋がらない。問われているのは「子どもの主体性」論や「子どもの興味・関心」論に振り回されてきた戦後教育の原点：「児童中心主義」だからである。

5 点在する改革視点

筆者が面白いと思った個別意見を拾い上げてみた。KJ法の「直観分類」によってもこれらは他の提案意見とあまり類似性のない「一匹狼」のご意見である。しかし、それぞれに背景の解釈に想像力が膨らんで興味が尽きない。例えば、「世代間を分断した事業は地域の力にはならない」という意見があった。「豊津寺小屋」は手を叩いて喜ぶであろうが、現状はすべて年齢別、対象別の分業であり、分断事業である。

また、例えば、「教員の体力・耐性作りから始めよ」という提案があった。指導者に体力・耐性が欠如していれば子どもの「生きる力」を育てることはまず覚束ない。筆者もPTAの関係で多くの学校を訪問させていただくが、中には本当に無気力な先生方に出会うことがある。戦前、戦中の「タフな世代」が逝った後、現代の学校は次の世代を育て切るのか？なるほど初めに教師自身の体力・耐性が問われているの

である。

さらには、「モデルとすべきモデルの質を吟味せよ一先進地概念に惑わされるな」という指摘があった。本当にそうである。ゆとり教育にしても、その具体策としての総合的学習にしても、学校評議員制度にしても、学校選択制にしても、ゲストティーチャーの活用にしても、モデルの選択を間違えれば、手本に習った結果も間違える。いくつわれわれはその種の間違いを繰返してきたことか！！

その他「まちはNPOやボランティアを重視するメッセージをコミュニティに送るべきである」、「教員の人事に自由裁量の余地を増やせ」、「教育委員会内部の人事を相互交流させよ」、「学校教育と社会教育の人材バンクを一本化せよ」、「PTA組織に実践部をつくれ—ex.「朝読み・読書部」等があったが、その他は紙数の関係で省略した。

お知らせ 第68回生涯学習フォーラム

7月の定例フォーラムは第25回中・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会で鳥取県大山町の山田晋教育長から提起された、「小1プロブレム」の実態を学びます。まず第1回は、現在、福岡県で「1年生」を担当している先生方の報告をお聞きします。フォーラムの展開は簡単な「インタビュー」の形式を取り、教育現場がどのような状況にあり、どう対処しようとしているのかを明らかにしたいと考えております。現場報告をお聞きした後の後半は、参加者によるブレイン・ストーミングを実施し、

問題の背景、対処の方法などを協議したいと思います。

日時： 平成18年7月15日（土）15時～17時

研究会終了後、センターレストラン「そよかぜ」にて夕食会を予定しています。

どうぞご参加ください。

場所： 福岡県立社会教育総合センター

会場その他準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。

（担当：朝比奈）092-947-3511まで。

敵は「伝統」と「しきたり」と「おのれ自身」

いつか担当してみたいと夢に見ていた研修が二つある。一つは過疎の町の「森林ボランティア」と「生涯学習」の結合事業、もう一つは結婚を可能にする独身男性のための準備講座である。この度、ある県のセミナーを担当する過程で参加の受講生から降って湧いたように締切り間際の補助事業の企画の募集が舞い込んで来た。筆者は研修の休み時間に思わず温めてきた構想を喋りまくった。受講生の何人かが興味をもってやってみたいと言う。筆者の熱が伝染したのか、セミナーを共同で担当した同僚もぜひ手伝いたいという。

以下は筆者の企画のエッセンスである。会場、予算計画、広報、募集手続きなど具体的な計画立案の手法は今回のセミナーで受講生は実習済みである。

企画は受講生のパイロット事業として任せていい。果して、実現するか。秋の楽しみがもう一つ増えたと喜んでいる。

● 発想の前提 ●

(1) 「変わりたくない男」は変われるか！？

男性はいざ知らず、女性の晩婚化と非婚化は女性自身の「基準」に叶う男性が身近に現れないためである。この仮説が間違っていないとすれば、結婚を望む男性はもう少し耳傾けて女性の声を聞かなければならない。おそらく男と女の波長のギャップは「男女共同参画」を巡る感覚と思想の問題であろう。伝統としきたりを

疑っていない多くの男たちは居心地のよい男性優位の現状から決して「変わりたくない」。日本文化の中で生きている以上若い男たちも例外ではない。「変わりたくない男」は果して変われるか！？

講座はそのような男に自己変革を迫るところから始めなければならない。

(2) 「おのれ自身」を鍛えよ

第25回生涯学習実践研究交流会のインタビューで福岡県立男女共同参画センター「あすばる」の中嶋玲子館長から男女の性別に由来する「得手／不得手」の分野を作るな、と提言があった。当の企画は高齢者問題を論じたのであるが、原則は若者の場合も変わらない。従来の性役割分業は不可避免的に男女の「得手／不得手」を固定化して来た。女性にアピールしようというのであれば、男がおのれ自身を鍛えるこ

とは当然である。中でも男女共同参画時代においては、男がこれまでやったことのない分野は重要である。それゆえ、今回の提案には料理実習やファッションやダンスなどを加えてみた。もちろん、コミュニケーションの能力や前向きな姿勢や肉体のトレーニングは女性にアピールしようとする以上必須科目であることは言うまでもない。

(3) 出会いは「縁」、結婚は「私事」、成るか成らぬかは講座の預かり知らぬところ

最初から言い訳をするつもりはないが、準備講座をやれば結婚が促進できるとは限らない。それは合同コンパをしても交流パーティーをしてもカップルが誕生するとは限らないと

いうことと同じである。出会いは「縁」、結婚は「私事」、成るか成らぬかは講座の預かり知らぬところである。まして講座のスタッフは生涯学習の仕掛人であって、仲人口はきかない。

県の担当者はそれでもやらせてみる気になるか！？男たちは「男女共同参画宣言」を出せるか？講座は人の心まで支配することはできな

いが、人の世は「志縁」に賭けてやってみるしかない。

(4) 人の世は仕方がない

最大の心配は補助事業を主催している県がプログラムの趣旨を理解しないことである。補助事業の企画例には若い男女が共に交流すれば、結婚に発展するかのような錯覚の上に提示されていた。それほど簡単なことであれば、誰も苦労はしない。発想が従来通りの「枠」を壊せないのは、受付窓口にも当然「変わりたくない男」がいるからである。中でも「くらの

高い」男たちが事業の趣旨を理解しない可能性が高い。その時はふたたび「女を知らずに田舎に朽ち果てて行く」多くの若者の悲劇が繰り返される。嫁不足で農業後継者は育たず、やがて農業も滅ぶ。日本にとって食糧の安全保障などはから文句になる。しかし、人が分らない以上、人の世は仕方がない。時が熟すまで待つしかないのである。

『若者の出会い応援事業』補助金1企画50万円！

企画の名称：『君は女の声に耳傾けることはできるか！？君は自分を変えることができるか！？』

－『男女共同参画時代の結婚準備講座』－

1 企画の背景と理念

晩婚化も非婚化も多くの農林漁業の後継者の結婚難も、その最大の原因は「変わりたくない男たち」にある。彼らはまだ居心地のいい男性優位の感情にどっぷりと浸かっているため「変わらなければならない」とは夢思っていない。彼らは自覚せぬままに、女性の声を聞こうとせず、日常における男女の共同参画の不可欠性を自覚していない。彼らは日本社会がその歴史と文化の中で作り上げた男支配の「伝統」と「しきたり」を鵜呑みにして、自分を取り巻く環境に無自覚・無意識に従っているのである。結果として、彼らは女性をどこかで一段下に見ている。女性の個性や能力を公平に認めず、女性を対等に処遇していない。

もちろん、現代の女性は自らの誇りを捨て、己の能力を犠牲にして、自分の基準に合致しない男との結婚を望むはずはない。農山漁村にも多くの娘はいる。しかし、彼女たちはもとより、その母も、女性を対等と認めない従来の伝統文化に染まった男との結婚を断固拒否している。結婚難の真の原因は、男女の対等を認めず、男の優位を当然としてきた「しきたり」と「伝統」と不文律の「システム」である。

したがって、少子化が止まらないのも、周り廻って、性別の役割分担を当然の事として、子育てや家事を女だけに背負わせてきた反「男女共同参画」の思想と感情である。それゆえ、男女の出会いをアレンジしても、結婚には繋がらず、少子化の防止にも繋がらない。男女の出会いを演出するのであれば、事前にはすべき事は「変わりたくない男達」の「自己変革」である。男達が女性の声に心から耳傾け、男女対等の思想を納得し、公平のエチケットを学び、男女共同参画の技術をマスターし、向上心豊かな女性に負けにくい程度の生涯学習の姿勢を身につけた時、はじめて結婚の前提条件が成立する。女性をお招きするのはその後である。もとより、男女の出会いが実現したとしても、結婚が成立するか、否かはそのあとの男女自身の「私事」である。男たちよ、『君は女の声に耳傾けることはできるか！？君は自分を変えることができるか！？』

本事業は出会いの前提を整えるための男の結婚準備講座である。プログラムの核心は男性の自己変革の学習と実習である。

2 募集人員 : 18才以上40才未満の独身男性、20～30名（4回の合宿連続講座を継続して受講できる人。但し、現在の自分を「絶対に変えたくない」、と考えている人は参加をご遠慮下さい。）

(臨時特別ゲスト第1回と最終回)：18才以上40才未満の女性(原則として独身者、但し必要に応じて既婚者の意見も聞く。講座の必要に応じて出席)20～30名

3 講座(プログラム)の概要

- (1) 第1回オリエンテーション合宿(金～土または土～日)：「問題の核心を理解しよう」・・・
- ① KJ法共同討議：結婚を巡る問題を探る一何が問題か?、なぜ問題か?どうすればいいのか?、どうしたいのか?
 - ② 講義：
 - * 女性はどのように考えているか?—「晩婚化、非婚化、結婚難」の真の理由
 - * 「筋肉を優先した文化の中の女性」-敵は「伝統」と「しきたり」
 - * アンケート調査：「君の日常行動を聞きたい!」
 - ③ 女性の「声」に耳傾けよう。「男達に言いたい!!!」
(女性ゲストの意見を聞く会)
-反論の禁止、批判の禁止、意味をただす質問のみを許可/後日「女性の声に答える」のスピーチ大会を準備する。
 - ④ 宿題実習：
自分が「自己変革」のためにやってみたいと思うことを申告・宣言して次回までに実行し、その結果を・記録して報告する。(報告様式を作成)
- (2) 第2回合宿：「表現力」を鍛える・・・
- ① 前回宿題の報告・発表「自己変革の宣言と実践」
 - ② 講義：表現したいものはあるか?表現の方法は身につけているか?
 - ③ スピーチ技法の基本(講義と演習)
 - ④ スピーチ・トレーニング演習・実習/個人別実習・班別実習
 - * スピーチ原稿の作成-ひとりKJ法(ワークショップ)
 - * 音読練習
 - * 2分間スピーチ実習と相互評価
 - ⑤ 宿題研究：
「パブリック・スピーキング;これを言いたい!」
3分間スピーチの原稿作成と練習と発表
- (3) 第3回合宿「肉体」を整える
講義・実習： 「男の身だしなみ」・・・男性講師
実習： 「肉体改造」-時と場所を問わない：日々基本体力を育てよ・・・空手または合気道の講師
実習： 「Shall We Dance?」・・・ジャズダンスやエアロビダンスの講師
- (4) 第4回合宿「得意料理を2つ作れ」-公開スピーチ
- ① 演習・実習： 「男の料理教室」・・・(男性料理講師)
 - ② 女性ゲストをお招きして試食会
 - ③ 公開スピーチ「女性の声に答える」
 - ④ 懇親・ダンスパーティー

4 番外編：メディア・アピール「男たちの男女共同参画宣言」

ローカルメディアの理解と協力を得て参加者のスピーチをアレンジした「男たちの男女共同参画宣言」を公表し、改めて男女の交流パーティーを企画する。

” おれたちは1円ももらってない”



-二本足の「ボランティアただ」論-



「寺子屋」の見学に来て、” おれたちは1円ももらってない”と「啖呵」を切った活動指導者がおられた、と報告があった。見学に対応した実行委員は” 人の善意だけにすがって責任の重い子育て支援を継続的に実行する事は困難ではないでしょうか”とやんわり躲そうとしたが、もとより「誇り高き共同体のボランティア」は納得なさらぬ。寺子屋では「有志指導者」に対する「費用弁償制」を採用しているだけではなく、「費用弁償制」こそが寺子屋を持続させ得る基本システムであると考えている。

ボランティアの「費用弁償制」を批判する方々の幸運と気概は大変結構なことだが、費用の弁償が必要でないのなら、一度受け取った上で会や事務局へお気持ちと一緒に返納していただけたらと奥床しい。現に山口県の生涯学習センターでは地域への貢献を前提とした研修の故に、参加者に研修旅費を支給したが、多くの研修参加者は、研修を受けさせていただきだけで十分であるとして支給された旅費を黙って返納された。

世の中はすべて「1円ももらわずに」他者への貢献を続けられる人々ばかりではない。そもそも「費用弁償制」が問題なのか？、それとも、「お金を受取っていること」が問題なのか？ 仮に、前者であるのならボランティア活動は費用弁償を必要としない「豊かな人々」の「特権」だということか？「海外青年ボランティア」や「海外シルバーボランティア」も費用弁償なしでやれということか？ボランティアの本場の欧米が

「費用弁償制」を採用している事をどう評価するのか？経済的に余裕のない人々はボランティアなどやるな、とでも言いたいのか！

また「金を受取る事がけしからん」というのであれば、黙って自分だけ返納すれば済むことではないのか！？社会的弁償を受けなくても思ったとおりの社会貢献を続けることができるということは何と幸運なことであろうか！

とにかく” おれたちは1円ももらってない”という啖呵は自慢がましく、当てつけがましいのである。見学者に対応した実行委員の困惑した顔が浮かんで誠にお気の毒である。彼らが「1円ももらっていない」と言う度ごとに、発言者の意図の有無に関わらず、結果的に、費用の弁償を受けてボランティア活動に参加している方々を威圧し、攻撃しているように聞こえる。費用弁償を受けないことが御自慢なのであろうが、費用弁償を受けながらコツコツとコミュニティのボランティアを続けている方々にケチを付ける必要はない。せっかく活動の意義やご自分の社会貢献の機会を見出した多くの善意に冷や水を掛けることはないであろう。世の中はすべて「1円ももらわずに」他者への貢献を続けられる人々ばかりではない。恐らくは、アホな研究者が広め、日本社会が誤解した「ボランティアただ論」の信奉者なのであろうが、まずは費用の弁償も受けずに日々のボランティア活動に参加できる己の幸運に感謝すべきであろう。

『あなた方も汗をかけ！』『一斉主義』：横並びの落とし穴

” おれたちは1円ももらってない”の次は恐らく『あなた方も汗をかけ！』ということ

になる。「一斉主義」は、ボランティア論において日本が最も欧米に劣るところである。す

に書いたところであるが、欧米のボランティアは個人個人の信仰を原点とした「神との約束」から出発した。したがって、ボランティアは個人の行為であり、他者の行動には原則として関知しない。神の恩寵は己れの信仰の実感であり、個人が感じ取って「汝の隣人を愛せよ」の教えに従って、社会を経由して神に捧げられる祈りの形だからである。

これに対して日本の奉仕論は共同体の構成員に対する「共益」の配分を出発点としている。みんなの為にみんなが働くという思想である。参加しないものはみんなが受ける分け前の分配には預かれない。だから「みんな汗をかけ！」という発想に繋がるのである。それはボランティアではない！それは共同体の勤労奉仕論の再生である。特に、現在活躍している方々が”おれたちは1円ももらってない”という気概で頑張っているらっしゃるとますます苦労は均等に分担すべきであるという感情に捕われる。地域の子は地域で育てよう！というスローガンは苦労はみんなで分担しよう、という感情の火に油を注ぐ事になる。

しかし、『あなた方も汗をかけ！』という声が聞こえてきた時「汗をかけない人々」は困

惑するばかりである。色々な事情でみんなと一緒に汗はかけないからである。福岡県K市の子どもたちが地域の行事に参加しなくなったのは、「汗をかけない保護者」がわが子に参加を遠慮するように指導したからである。

ライフスタイルが多様化し、価値が分裂し、人々の行動が個々の「選択」を原点とするようになれば、ますます「共益型一斉主義」の伝統的共同体は機能しなくなる。前回、高齢者介護の建て前である「自助→共助→公助」のサイクル論は「共助の崩壊」によって機能しなくなると書いたが、”おれたちは1円ももらってない”『あなた方も汗をかけ！』の論理が横行するようになればやがてボランティアも崩壊する。現にいまでもコミュニティのボランティアただ論は機能していない。対象の子どもが100人を超え、子育て支援日数が年間200日を超えた時、子どもたちに多様な活動の場と機会を提供しようとすれば、”おれたちは1円ももらってない”ことを誇りとする人々だけではすでに手に負えない。「無償制」原則を十分に吟味しない短絡的な「ボランティアただ論」の罪は深いのである。



A 小学校への提案—その4

「食育」の死角

1 技術論の限界

子どもの食の乱れの報道が相次いでいる。端的に言えば、子どもは栄養のバランスを失っている。時に過食であり、時に欠食である。結果的に栄養はアンバランスである。警鐘を鳴らす人によれば、子どもは食べたい時に、食べたいものしか食わず、食べるべき時に、食べるべきものを食べていない。提供された食のバランスが取れていても、子どもは気に入らなければ、決して食べようとはしない。文科省が栄養指導の専門家を各地に配置したというニュースも広がってあちこちの子育て支援会議に行くと

「食育」の合唱が始まったようである。

技術論としての「食育」の論理は正しい。食育が重要であることにも異存はない。しかし、技術論で子どもの食生活を変容させる事は出来ない。食の乱調は「食育」では解決しない。栄養指導の専門家配置はふたたび税金の無駄使いに終るであろう。もったいない事であるが現代の教育行政につける薬はない。

子どもが好きなものだけ食べて、嫌いなものに見向きもしないのは、食の技術論の問題ではない。好きな事だけやって嫌いな事を拒否す

る傾向は子どもの日常の全域に及んでいる。教科の学習でも、体験プログラムの選択でも、日々の生活全体が「好きな事だけ、好きなようにやる」のが現代っ子の特性である。食生活のアンバランスは食育の失敗の結果ではない。食の問題を「食育」で解決できると思うのは専門

家の死角である。なぜなら、好きなものしか喰わない子どもは好きな事しかさせなかった子育ての結果であり、嫌いなものは決して食べようとしない子どもは子どもの「主体性」や「興味・関心」を最も重視した教育の「成果」だからである。

2 原因の根本は子どもの「主体性」を野放しにしたことである

-教育行政も学校も声高の「主体性論」に振り回されてならない-

欧米流「児童中心主義」の教導者は二言目には子どもの「興味・関心」が重要だといひ、子どもの「主体性」・「自主性」を尊重せよといひ。それゆえ、「子どもの目線」が大事で、「社会の視点」は相対的に大事ではない。

しかし、考えるまでもなく、子どもの「興味・関心」も、「主体性」も最初から子どもに備わった所与の条件ではない。乳幼児は基本的に教育上は「白紙」である。自分の事もまだ自分では出来ない。自分の事もまだ自分では決められない。世の中の価値も当然、弁えてはいない。これらはすべて「育てる」ものである。自律的に学ぶものではない。他律的に教えるものである。「すぐれた少年」は彼らが「なる」ものではない。われわれが「優れた少年」に「す

る」のである。

子どもは「学習の主体」になる以前に「教育の客体」である。従って、子どもが備えるべき条件は基本的に教育や他律の結果である。社会や家族が子どもに教えるべき大部分のことは子どもが生まれる前から決っている。教えるべきことの大部分は生活の「型」であり、従うべき「しつけ」である。家族や幼児教育・保育施設の指導が子どもの「興味・関心」や、「主体性」という名の移り気なわがままや勝手に振り回されてはならない。学校が当面している「小1プロブレム」は、家族と世間が子どもの放縦を許した結果である。子どもの「食」の崩壊は子どもの「主体性」を野放しにした結果である。「食育」で対応することはできない。

3 失敗の根本原因

発達途上にある子どもの「興味・関心」から出発し、未熟な主体性や自主性に決定を任せれば、結果も未熟な独り善がり終らざるを得ない。欧米の「児童中心主義」は、欧米の社会が「大人中心主義」であることを前提としている。欧米の子育て風土は原則として厳しい他律の中で子どもをしつける。言う事を聞かない子の「スパンキング（尻を叩く）」はしつけの常識である。かつては「スパンキングボード」と呼ばれる板で尻をたたいていたことも知る人は知っているであろう。そのような風土だからこそ教育者は、子どもへの過度の抑圧を防止するため、子どもが主役であり、学習者が中心であるべきことを説いたのである。

一方の日本は「子宝の風土」である。子どもは大事にされ、「たからもの」として護られ、

大人は子どものためであれば、献身的に奉仕する。そのような風土を前提にして、「半人前」に日々の決定権を委ねるのは教育の放棄に等しい。失敗の根本原因は重ねてはならないものを重ねたことである。戦後日本の教育は「子宝の風土」に、欧米型の「児童中心主義」を重ねてきた。子どもに尽くす風土に、子どもを尊重する思想を重ねてきた。児童中心主義は子どもの「興味・関心」を尊び、子どもの「主体性」を重視する教育思想である。子宝の風土と児童中心主義の結合は文字どおりの「屋上屋」を重ねたことを意味する。重ねてはならないものを重ねれば、子どもの決定権が異常に肥大する。未熟で、自己中心的な子どもが決定すれば、わがままと勝手が増殖する。好きな事しかやらないのは、それが子どもの「主体性」であるとい

う解釈がまかり通るからである。やりたくない事をやらないで済むのは子どもの「興味・関心」を抑圧するな、と尤もらしく教育論で語る人がいるからである。

「好きなものしか食べない」のは子どもの「主体性」を重視した結果である。「嫌いなも

のは拒否する」のも子どもの興味関心が一人歩きした結果である。食生活が乱れるのはわがままで、勝手な子どもがやりたい放題にやった結果である。今ごろ「食育」の必要を説くのは誠に迂闊なことであった。



MESSAGE TO AND FROM



お便りありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがございましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 佐賀県吉野ヶ里町 最所 三千夫 様

偶然ながら全員のブレイン・ストーミングを実施した今回のフォーラムにおいでいただき喜んでおります。佐賀と福岡はますます道が近くなりましたのでどうぞこれからもご自由にお出かけ下さい。皆様からいただいたお知恵は巻頭小論のようにまとめてみました。戦後60余年の変化と結果に対して様々な視点から教育行政の革新が求められていることは明らかですね。これらの要請に応える事が出来なければやがて教育委員会無用論に繋がって行く事は当然の成り行きでしょう。

★ 岡山県里庄町 安田隆人 様

25回大会の整理の中でお便りを再読し、随分と励みになりました。遠くからご参加ありがとうございました。岡山の優れた事例を通して、御地の皆さんとのネットワークも広がって

嬉しく思っております。今年は子育て支援事業のご縁で岡山大学の主事講習にもお邪魔する事になっています。熊谷先生や福原洋子さんにお目にかかる事を楽しみにしております。来年度以降の大会も宜しくご支援下さい。

★ 島根県益田市 大畑伸幸 様

返事が遅くなりました。いつぞやは「寺子屋サミット」構想へのご賛同ありがとうございました。福岡でも筑豊教育事務所の奮闘によっていくつかのモデルが生まれ始めました。山口も赤田先生が県の生涯学習センターと自治体の共同事業として企画をされています。具体的な相談は岡山大学の社会教育主事講習の合間でやりましょう。熊谷先生には昼食会のセットをお願いしました。福原さんも来て下さるといいですね。

* 過分の郵送料をありがとうございました。 *

★佐賀県吉野ヶ里町 最所三千夫 様 ★福岡県宗像市 牧原 房代 様
★広島県府中町 中村由利江 様 ★高知市 元吉喜志男 様





編集後記：「論理の赴くところ」

77号まで書いてみると、ささやかな執筆活動でも時に Writer's Block(書くことの壁)に襲われる。自分に経験はないがスポーツ選手のスランプのようなものか？突然行き詰まって、訳もなく書けなくなるのである。フォーラム論文も、「風の便り」も何度も論理が空回りをして、文章が行き詰まるのである。

参考書に戻っても、資料を勉強してもダメな時はダメなのである。そういう時の締切りはありがたい。「締切り」の意味は「あとがない」ということである。どんなに不満でも、どんなに未完成でも、締切りまでに到達した論理で筆を置くしかない。執筆において締切りこそは「火事場力」のものである。

他律は自律よりも圧倒的に強い。義務感とは自由な裁量よりは圧倒的に強い。締切りは社会が個人に課す強制力のある他律である。約束を守ることのしつけは締切りの他律に従うしつけである。

人生における「締切り」の意味も何度か思い知った。この世は「締切り」がなかったら成就できないものはさぞ多いことであろう。「締切り」がなければ、書けるものも書けないからである。それでもどうにもならないことは何回も起る。最近、そのような時に、戻って行く書物がある。それが古田武彦氏の古代史に関わる著作である。

今の年齢に至るまで、恐らくは他の方々と同じように、尊敬する作家や研究者に巡り会った。その代表は政治学者の丸山真男さんや批評家の小林秀雄さんであった。彼らは世間の評価も十分に得て、小林に至っては文化勲章も受賞している。これに反して古田氏は無冠の研究者である。ここ十数年の読書によって古田氏の著作への筆者の評価は丸山、小林の両氏を越えた。それは古田氏の研究の「論理」の正確さ、「論理」への忠実さ、論理的でないことは言わないという律儀さによる。古田さんの本は論理は正確、方法は明解この上ないが、論証に至る古文書の資料を読み解く経緯は広く内外の史書・文献に亘り極めて難しい。それゆえ筆者の学力では歯がたたないことが多く、何回も読みかえす。論証に使用さ

れた個別資料を覚えられないので前に読んだところに戻ってくり返して読む。頭の中で古田氏が論証に使った必要な資料を積み上げて行く。古田氏の記憶力と論理の構成力に驚かされる時である。古田さんが最後に結論を下される時、「論理の赴くところ」かくかくとなる、とおっしゃる。

長年連れ添った妻は、古田氏の著作を読んだ後の私の精神の高揚を察知している。この頃では私が頭を掻きむしって、書けなくなると”古田さんを読んだら”、と言うようになった。連続2冊の出版を果すまでのここ数カ月は合間、合間に古田さんを読んでエネルギーと使命感をいただいた。

魏志倭人伝に表された古代の日本は『邪馬台国』ではない。『邪馬壹国』である。倭人伝文中「台」の字は1回たりとも出て来ない。すべて「壹」の字である。また、古田氏は、三国志全体を検証し、「壹(いち)」の字を「臺(たい、だい)」の字に書き間違ったところが一つもないことを証明した。歴代の研究者が「ヤマト」に比定して、「壹」を「臺」と書き間違えたに違いないと恣意的に解釈してきたところを一字一句克明に反証したのである(*)。論理の赴くところ卑弥呼の国は『邪馬壹国』なのである。古田氏は論理の一貫性をあらゆる権威や定説の前に置く。それゆえ、史学会の黙殺にも耐える。われわれが習ってきた歴史が如何にいい加減であったか！既存の学会は若い研究者までを含めてなぜ彼の疑問に正面から応えようとならないのか？古田古代史を読むと学閥の弊害や外部批判を受け付けられない日本の研究「体質」を垣間見ざるを得ない。学会が無視しても論理の正しさは消えはしない。論理を尊重する読者のいることを信じて書き続けた古田史学のエネルギーと寡黙な情熱が筆者を奮い立たせるのであろう。

(*) 古田武彦、「邪馬台国」はなかった、角川文庫、昭和52年

『編集事務局連絡先』 (代表)三浦清一郎：〒811-4177 宗像市桜美台29-2

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。2006年7月号からご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90円切手6枚、または現金540円をお送りください。

